

「保育」の感覚的イメージ（1） 味覚的イメージについて

青木里喜子

Rikiko Aoki

はじめに

「質のよい保育者」を養成することが、我々養成校の課題である。

「質のよい保育者」とは、どのような能力や態度、即ち「質」が要求されるのであろうか。

ルソーは、エミールのはしがきの中で、「一体われわれは子どもというものを少しも知っていない。われわれが現在のように子どもについて誤った考えを持っているかぎり、それにもとづいて教育をやるとなると、やればやるほど誤った教育になってゆくばかりである。人々は子どもがおとなになる前にどんな存在であるかを考えてみることなしに、子どもを大人扱いする。私をもっとも力を注いだのはこの子ども研究である。」と、教育研究の根本はまず子どもの研究だといひ、子どもを正しく知ることが基本的な研究課題だといっている。

このことは、我々に教育の対象を知れということである。即ち、我々が学生をよく知ることが、「質のよい保育者」養成につながるものだと信じる。

さて、保育科を志望し、将来保育者になることを目的に入学して来た学生達は、「保育」をどのようにとらえているのであろうか。我々と同じようにとらえているのであろうか、それとも違うのであろうか。又保育の場の保育者は「保育」をどのようにとらえて保育しているのであろうか、学生達とはどのように相違するのであろうか。

学生達に、「なぜ保育科を選んだのか」と問うと、「子どもが好きだから」・「幼ない頃の憧れだから」と答え、又「女性の職業として安定・母親業（子育て）に最適」と答える。

では、「保育とはどんなことか」と問うと、「子どもを教育すること」・「養護と教育であって子守ではない」と、殆んどどの学生は答える。

「子どもが好き」・「幼ない頃からの憧れ」、これらは保育者としての重要な一要素ではあるけれども、それ故に保育者に適しているというのは軽率であり、「保育は教育だ」ということも間違っていない。しかし、だから「保育」を理解しているとはいえない。では、学生の内面を知るよい手だてはないだろうか、幼な子のように純粹に、自然に内面がでてくるのはどんな時であらうか。

井上は、「まなざしの人間関係」の中で、赤い情熱の声・緑の誠意の声・黄色い感謝の声を使うといい、川合・島田（1973）の研究によると、父親・兄弟・病氣・叱られているは寒色系、お母さん・先生・かわいいは暖色系、おばあさん・夢・さみしいは中間色系という刺激語による色彩図型の選択結果を出している。

これらのように、ことばには、概念的意味と同時に、個人にとって特有な情緒的な意味がある。情緒的な意味には、個人の具体的な経験や心情が反映されているはずである。したがってことばのもつ感覚的イメージをとらえることによって、その個人の経験や心情をより深いところ

ろで理解できると考えられる。

特に感覚の中で最も原始的といわれる味覚的イメージには、「甘いことば」・「苦い思い」のように、人の心の内面や体験をじかに相手に伝え共感させるものがあると考えられる。

初恋の味はカルピスの味といわれるが、初恋を経験した者は甘酸っぱい初恋に思いをはせることもできる。このように共感的理解ができるのは、原始的味覚を共有できるからであろう。

以上のように考え、保育科学生や、現場保育者の「保育」のイメージの表出を「味覚」との関連においてとらえ、その「保育像」を理解し、あわせて保育者適性の問題も考えてみたい。

方 法

〔1〕 調査の対象と時期

- 1) 昭和53年度から昭和56年度まで、1年生に入学3ヶ月以内、2年生に実習終了後、表1、表2のアンケートを実施した。
- 2) 昭和56年7月に保育者対象に表3のアンケートを実施した。
- 3) 昭和57年2月に、1年生(実習未経験)169名、2年生(実習経験済)141名に対して、アンケートを集団実施した。

〔2〕 調査の内容

- 1) については、表1、表2。2) については表3のとおりである。3) については、「保

表1 (1年生)

(1)年 ()組 ()番 氏名()		
保育者になろうとした動機はいろいろと思いますが、「保育」とはどんなことでしょうか、貴方の思っている「保育」を表現してみてください。		
色で例えるなら何色でしょう。		何故そう思うのか、具体的に記入して下さい。
音に例えるならどんな音でしょう。		
味ならどんな味でしょう。		
臭いならどんな臭いでしょう。		
手ざわりなら、どんな手ざわりでしょう。		
その他、保育について知っていること、考えている事、何でもよろしいから意見を記入して下さい。		

表2 (2年生)

(2)年 ()組 ()番 氏名()		
保育所実習が終了しましたが、実習を体験的に経験し、「保育」をどのようにとらえたのか、表現して下さい。		
色で例えたならどんな色でしょう。		何故そう思うのか、具体的に記入して下さい。
音に例えるならどんな音でしょう。		
味ならどんな味でしょう。		
臭ならどんな臭いでしょう。		
その他、感動したこと、つらかったこと、遠慮なく記入してください。		

表3 (保育者)

無記名 経験年数(年 月)		
保育をどんな形でとらえて下さってもかまいません、余りむつかしくお考えにならないで、いろいろな面からとらえて下記に記入して下さい。		
色で例えるなら何色でしょう。		何故そう思うのか、具体的に記入して下さい。
音に例えるならどんな音でしょう。		
味ならどんな味でしょう。		
臭いならどんな臭いでしょう。		
手ざわりなら、どんな手ざわりでしょう。		
保育に関することなら、どんなことでもよろしい意見を記入して下さい。		

育」の連想人物を9人物(おばあさん・おとうさん・お母さん・保母さん・お守さん・子ども(幼)・赤ちゃん・園長先生・その他)のうち1人物のみを選択する。次に「保育」の連想食品を1つのみ記入し、その連想理由を記述させた。

経 過 と 結 果

〔1〕 方法1)の結果について

色彩でとらえた「保育」のイメージは、「子どもは純白、その白をその子なりに染めていく

ことが保育」と、子どもをイメージした白がトップで、次はピンク・ブルーと淡色系であった。音での表出は、騒がしい子どもの声を主位に、楽器の音・オルゴール・優しい母親の子守唄であった。感触は、ピロードのように柔らかいもの・赤ちゃんのホッペ・つきたての餅と答え、子どもの肌をイメージしたものが多かった。味と臭いは共に甘酸いものが多く列記されていた。

これらの記入理由は種々で、保育の場を知らない1年生も、実習経験をした2年生も、「保育」はこうありたい、こうしたいという願いや夢を画いたものが多く見られた。例えば、音は「時計の振子の音」その理由は、「このリズムカルな振子が絶え間なく時をきざむように、保育も振子と同じように止ることなく子どもにかかわり、その成長の時をきざんでいかねばならない」と。これらの記述内容には共感をよぶものが多く、学生のもつ「保育」のイメージを心情としてとらえることができた。

学生のもつ、学生気質は近年年毎にその様相は変化し、保育科学生も例外ではない。しかし、毎年実施したこの調査の結果は不思議に同じ傾向を見せるのである。

表4は表1の連想食品の集計結果である。これによると、「保育」の連想食品は、甘い甘酸っぱいに、4年間を通じて集中している。これらの調査結果から学生のもつ「保育」のイメージ、特に味覚から学生の内面を理解したいと考えて、方法3)の調査を行った。

〔2〕方法2)の結果について

表5は、保育者の集計結果である。これによると、保育者の「保育」の連想食品は、オレンジ型と、するめ型に集中していることが分かる。

オレンジ型は、保育者としての経験年数が多くなるにつれてその割合は減少しているが、反対に、するめ型は増加していることが注目される。

〔3〕方法3)の結果について

1) 「保育」の連想人物

「保育」の連想人物は、表6「子ども」が多く、次いで「保母さん」・「お母さん」・「赤ちゃん」の順で、その他は少数にすぎない。4位までの割合を学年で比較すると、実習経験をした2年生は、1年生に比べて「子ども」と「保母さん」の割合が多くなり、「お母さん」と「赤ちゃん」の割合が少なくなっている。

表4 年度別「保育」の連想食品 S53-56 1年生のみ

味の類型	年度					計
	53年度	54年度	55年度	56年度	計	
オレンジ型	20(30.3)	33(30.3)	46(42.6)	27(29.3)	126(33.6)	
ケーキ型	27(40.9)	42(38.5)	33(30.1)	26(28.1)	128(34.1)	
ミルク型	6(9.1)	13(11.9)	9(8.3)	5(5.4)	33(8.8)	
カレー型	2(3.0)	5(4.6)	6(5.6)	8(8.7)	21(5.6)	
くすり型	2(3.0)	8(7.3)	4(3.7)	4(4.3)	18(4.8)	
するめ型	9(13.6)	8(7.3)	10(9.3)	22(23.9)	49(13.1)	
計(人類%)	66人(100.0)	109人(100.0)	108人(100.0)	92人(100.0)	375人(100.0)	

表5 保育者の「保育」の連想食品の類型及び保育経験による比較

類型	味	具体的食品名	経験年数			計
			1年~3年	4年~10年	11年~20年	
オレンジ型	甘酸	すもも, りんご, レモン, みかん, キャンディー, フレンチサラダ, ぶどう, 桃, レモンティー, なつみかん, あんず, カルピス, サクラランボ, 三杯酢	9(52.9)	11(40.7)	8(34.8)	28(41.8)
ケーキ型	甘い	キャンディー, ドロップ, ユマロ, 砂糖	2(11.8)	1(3.7)	2(8.7)	5(7.5)
ミルク型	うす甘味	母乳, ホットミルク, ミルク	1(5.9)	2(7.4)	0(0)	3(4.5)
くすり型	苦い	くすり	0(0)	0(0)	2(3.0)	2(3.0)
カレー型	辛塩塩	塩から, 塩, 甘からおかき	1(5.9)	2(7.4)	0(8.7)	3(4.5)
するめ型	複雑	さんしょ, マス, カット, ゆず, みるめ, おかず, 梅, ソーヒー, クリームシチュー, スパイス, うす汁	4(23.5)	11(40.7)	11(47.8)	26(38.8)
計			17(100.0)	27(100.0)	23(100.0)	67(100.0)

表6 「保育」の連想人物

人物	学年									計
	子ども	保母さん	お母さん	赤ちゃん	園長先生	おばあさん	お父さん	お守さん	その他	
1年	69(40.8)	33(19.5)	41(24.3)	22(13.0)	1(0.5)	1(0.5)	0(0)	0(0)	2(1.0)	169(100.0)
2年	65(46.1)	39(27.7)	27(19.2)	9(6.4)	1(0.7)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	141(100.0)
計	134(43.2)	72(23.2)	68(21.9)	31(10.0)	2(0.6)	1(0.3)	0(0)	0(0)	2(0.6)	310(100.0)

2) 「保育」の連想食品

a 「保育」の連想食品の順位——連想された食品を上位10位まで見ると、表7のように「ミルク」は22%で最も多く、「オレンジ」・「りんご」・「イチゴ」と殆んど同じ割合で、果物が上位を占めている。

表7 「保育」の連想食品の順位

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
品名	ミルク	オレンジ	りんご	イチゴ	ケーキ	レモン	ヨーグルト ミルク 桃	マシュマロ あめ 肝油 みそ汁	するめ	クッキー 綿菓子
人数	70	23	22	18	13	10	7	6	5	4
%	22.6	7.4	7.0	5.8	3.9	3.2	2.2	1.9	1.6	1.3

b 「保育」の連想食品の種類——連想された食品を種類別にするると表8で、その種類は75種類にも達し、そのうちでも最も多いものは菓子類で19品種、連想人数の多いものは果物類の84人とミルク類の82人である。又主食・副食・その他の食品が28種類で37%を占めていることは、保育のもつ日常性、生活性を示しているようで興味深い。

c 「保育」の連想食品の味の分類——これによると、(表9) 連想食品は、オレンジ型の甘酸っぱいものが30.6%と最も多い。

表8 「保育」の連想食品の種類別

種類別	食品名	人数%	種別%
果物類	りんご, オレンジ, (みかん)イチゴ, 桃, レモン, ぶどう, 柿, なつめ, パナナ, すもも, さくらんぼ, 西瓜	82 (27.0)	12 (16.0)
乳類	牛乳, 母乳, 粉ミルク, アイスクリューム, ソフトクリーム, ヨーグルト	82 (26.5)	5 (8.0)
菓子類	ケーキ, ミルキー, 綿菓子, あめ, あんまん, マシュマロ, クッキー, ようかん, シュークリーム, ゼリーピンズ, 砂糖菓子, アップルパイ, ホワイトローズ, ビスケット, コンペイ糖, せんべい, ウエハース, チョコレート, かんしゃく玉	68 (21.9)	19 (25.3)
主食副食 その他の類	ごはん, 巻寿司, おべんとう, カレーライス, 味噌汁, シチュー, 煮え塩から, 芋, ぎょうざ, とうふ, レタス, タイ, フグ, とうがらし, スパイイス, キムチ, ハッカ, するめ, ごんぶにぼし, きな粉, 水, 空気, 卵焼き, ぐすり, 肝油, にぼし	63 (20.0)	28 (37.0)
飲物類	カルピス, クリームソーダ, レモンテイ, オレンジジュース, レモンミルク, コーヒー, オレンジスカッシュ, さとうレモン, 抹茶, はちみつレモン, イチゴミルク	13 (4.2)	11 (14.6)
計		310 (100.0)	75 (100.0)

学年比較では、1年生はオレンジ・ケーキ型と甘い食品に集中しているのに対して、2年生は、ミルク型が最も多く、オレンジ・するめ・ケーキ型とより多様な味の食品を連想している。

特に複雑な味の食品(するめ型)を連想している割合が、2年生に多いのには注目されることである。(この食品の類型別は、学生の自由記述の内容をもとにしたもので、食品学の類型とは違うことを書き添える)

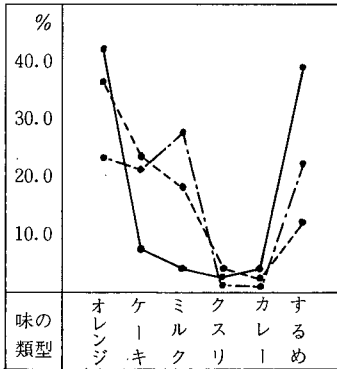
図1は、「保育」の連想食品の味の類型を、1年生、2年生、保育者と比較したものである。

3) 「保育」の連想人物と連想食品の関係——このことを、「子ども」と「保育さん」で見ると表10のように、「子どもを連想したものは、オレンジ・ミルク・ケーキ・するめ型に分散し、「保育さん」を連想したものは、オレンジ・ケーキ型に集中している。学年比較では、

表9 「保育」の連想食品の味の類型分類

類型	味	具体的食品名	連想した人数%		
			1年	2年	計
オレンジ型	甘酸	りんご, オレンジ(みかん)イチゴ, 桃, さくらんぼ, レモン, ぶどう, すもも, なつめ, パナナ, オレンジスカッシュ, レモンミルク, さとうレモン, はちみつレモン, カレービス, ヨーグルト, レアチーズ, レモンケーキ, かんしゃく玉	62 (36.7)	33 (23.4)	95 (30.6)
ケーキ型	甘	ケーキ, ミルキー, 綿菓子, あめ, あんまん, マシュマロ, シュークリーム, ゼリーピンズ, ビスケット, コンペイ糖, せんべい, ウエハース, ようかん, 柿, 甘かん, 西瓜	40 (23.7)	30 (21.3)	70 (22.6)
ミルク型	無味 す 甘	母乳, 牛乳, 粉ミルク, アイスクリューム, ソフトクリーム	31 (18.3)	39 (29.7)	70 (22.6)
くすり型	苦	ぐすり, チョコレート, コーヒー, 抹茶, にぼし, レタス	8 (4.7)	4 (2.1)	12 (3.9)
カレー型	辛 又 塩	カレー(カレーライス)塩から, とうがらし, しょうゆ, せんべい, にしめ, キムチ	7 (4.1)	3 (2.8)	10 (3.2)
するめ型	複雑	するめ, ごんぶ, 肝油, ハッカ, 味噌汁, ぎょうざ, シチュー, 魚, 卵焼き, ごはん, おべんとう, 水, 空気, きな粉, 芋	21 (12.4)	32 (22.9)	53 (17.1)
計			169 (100.0)	141 (100.0)	310 (100.0)

図1 「保育」の連想食品の味の類型比較表



1年生
 2年生
 保育者

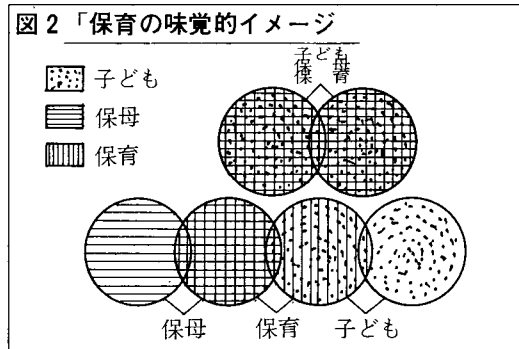
表10 「保育」の連想人物と連想食品の類型

人物学年 類型	子ども			保育さん		
	1年%	2年%	計%	1年%	2年%	計%
オレンジ型	25人 (36.2)	13人 (20.0)	38人 (28.4)	13人 (39.4)	10人 (25.6)	23人 (31.9)
ケーキ型	17 (24.6)	11 (17.0)	28 (20.9)	7 (21.2)	12 (30.9)	19 (26.0)
ミルク型	13 (18.8)	18 (28.0)	31 (23.1)	6 (18.2)	8 (20.5)	14 (19.4)
カレー型	3 (4.3)	2 (3.1)	5 (3.7)	1 (3.0)	1 (2.6)	2 (2.9)
くすり型	5 (7.2)	2 (3.1)	7 (5.2)	3 (9.0)	2 (5.1)	5 (7.2)
するめ型	6 (8.7)	19 (29.2)	25 (18.7)	3 (9.0)	6 (15.4)	9 (13.0)
計	69 (100.0)	65 (100.0)	134 (100.0)	33 (100.0)	39 (100.0)	69 (100.0)

1年生はオレンジ・ケーキ型に、「子ども」も「保育さん」も多く見られ、2年生では、「子ども」はするめ・ミルク型に多く、「保育さん」はケーキ・オレンジ型に多く見られた。

これらことから、「保育」の味覚的イメージは、図2のように、1年生は「保育」「子ども」・「保育さん」を総べてオレンジ・ケーキ型(甘酸っぱい・甘い)に集中した、単純画一的な未分化のイメージを示し、3回の実習体験をもつ

2年生では、オレンジ・ミルク・ケーキ・するめ型と、相互に共通項をもちながら複雑に分化したイメージが特徴として見られた。



- ・子どもの乳くささや臭い
- ・子どもの心の純粹さや素直さ、明るさ。
- ・子どもの活動(遊び)や表情。
- ・子どもの成長、自己主張やいたずら、個性。
- ・子どもを育てる栄養や愛情、又は子どもの成長

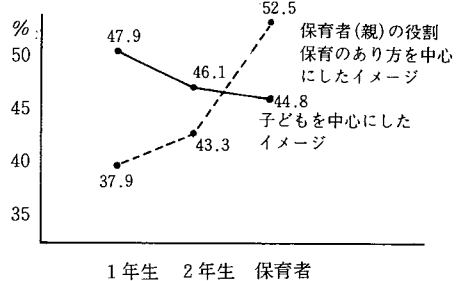
- (2) 保育者や園舎を中心にしたイメージ。
- ・園舎のカラフルな色彩、遊具や玩具、机や椅子、その他の環境
 - ・保育者の優しさ、あたたかさ、厳しさ、明るさ、若さ、他

- (3) 保育者(親)としての役割や、保育のあり方を中心にしたイメージ
- ・地味、家庭的・労働・忙がしい、苦しい、大変。
 - ・教育者、保護、母親がわり、友達、しつけ、人間形成

4) 「保育」の連想食品と連想理由
 「どうしてその味を保育の味だと思うのですか」と、いう問いに答えた自由記述を大別すると、

- (1) 子どもを中心にしたイメージ。
 ・子どもの外見的な愛らしさや肌の色。

図3 「保育」とは(イメージの強さ)



- ・楽しみ、さわやか、働き甲斐、味のあるもの、他
 - (4) 幼ない頃の思い出を中心にしたイメージ。
 - ・待遠かった給食、給食にいつもでた。
 - ・お母さんの手づくりのおやつやおべんとう。
 - ・とても嫌いな給食、(ミルク)
 - ・毎日うたっていたアイスクリームの歌、他
 - (5) その他、苦い経験など、に分けることができる。
- 自由記述を以上の項目で分類集計したものが表11である。

表11 「保育」の連想食品と連想理由

イメージ	子どもを中心にしたイメージ	保育者や園を中心にしたイメージ		保育者(親)の役割保育のあり方を中心にしたイメージ		思い出、その他を中心にしたイメージ		計			
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
味の群	1	24	(38.7)	0	(0)	37	(59.7)	1	(1.6)	62	(100.0)
	2	13	(39.4)	2	(6.0)	17	(51.5)	1	(3.0)	33	(100.0)
	保	10	(35.7)	1	(3.6)	17	(60.7)	0	(0)	28	(100.0)
オレンジ型	1	21	(52.5)	8	(21.0)	5	(12.5)	6	(15.0)	40	(100.0)
	2	22	(73.3)	1	(3.3)	6	(20.0)	1	(33.3)	30	(100.0)
	保	5	(100.0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	5	(100.0)
ケーキ型	1	29	(93.5)	0	(0)	1	(3.2)	1	(3.2)	32	(100.0)
	2	25	(64.0)	3	(7.6)	5	(12.8)	6	(15.3)	39	(100.0)
	保	3	(100.0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	3	(100.0)
ミルク型	1	2	(25.0)	2	(25.0)	4	(50.0)	0	(0)	8	(100.0)
	2	0	(0)	0	(0)	4	(100.0)	0	(0)	4	(100.0)
	保	2	(100.0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	2	(100.0)
くすり型	1	2	(28.6)	0	(0)	5	(71.4)	0	(0)	7	(100.0)
	2	0	(0)	0	(0)	3	(100.0)	0	(0)	3	(100.0)
	保	1	(33.0)	0	(0)	2	(66.6)	0	(0)	3	(100.0)
カレー型	1	3	(14.3)	1	(4.8)	12	(57.1)	5	(23.8)	21	(100.0)
	2	5	(15.6)	0	(0)	26	(81.3)	1	(3.1)	31	(100.0)
	保	9	(34.6)	0	(0)	16	(61.5)	1	(3.1)	26	(100.0)
するめ型	1	81	(47.9)	11	(6.5)	64	(37.9)	13	(7.8)	169	(100.0)
	2	65	(46.1)	6	(4.3)	61	(43.3)	9	(6.3)	141	(100.0)
	保	30	(44.8)	1	(1.5)	35	(52.2)	1	(1.5)	67	(100.0)

表11を全体として見ると、子ども中心のイメージと、保育者(親)としての役割や、保育のあり方を中心にしたイメージの食品表出が多いことに注目される。

又少数ではあるが、幼ない頃の思い出を中心にしたもの、保育者や園舎からの「保育」の味覚的イメージ、その他も見逃せない。

又それらは1年生にその割合が多く見られ、2年生、保育者と次第に減少していることも興味深い。

図3は、子どもを中心にしたイメージと、保育者(親)の役割、保育のあり方を中心にしたイメージを、1年生、2年生、

保育者と比較したものである。これで見ると、子どもを中心にしたイメージは、1年生、2年生、保育者と、次第に弱くなり、保育者(親)の役割、保育のあり方を中心にしたイメージは1年生、2年生、保育者と次第に強くなっていることが分かる。

5) 自由記述の内容——表12は1年生、表13は2年生、表14は保育者、

表12

1年生	どうしてその味を保育の味だと思うのですか
子どもを中心にしたイメージ	・子どもはさわやかとどろけそうになる ・おいしい ・お母さんの乳の臭い ・太陽をいっぱいあびて真赤 ・1粒1粒味が違う ・甘いものもあるし、苦いものもある ・ミルクで育つ ・子どもとミルクはつきもの
保育者や園を中心にしたイメージ	・強い甘味はないがふかふかとした甘さがある ・口の中に広がる甘さは保育者の心 ・子どもをしっかりとらした厳しい目で見ている ・責任が重い ・明るい薬味でお母さんの味 ・外見は余りよくないが中味は甘く優しい
保育者や親の役割、保育のあり方を中心にしたイメージ	・甘くも辛くもないが好き ・誰にもできそうだけど難しい ・甘い部分と、厳しい部分も必要 ・子どもを育てることは大変 ・辛いけど、とても美味しい ・長く煮込む程おいしい味になる ・いちばん安心できる味 ・先生に子どもが守られている ・手を抜いたらいけない ・スカットさわやか ・噛めば噛む程味がある
思い出、その他を中心にしたイメージ	・給食のおやつがおいしかった ・園で毎日もらっていた ・小さい頃飲んでいた ・薬のように苦くて嫌なもの ・アイスクリームの歌をうたっていた ・記憶の中に甘いものがある

表13

2 年 生	どうしてその味を保育の味だと思うのですか
子どもを中心に したイメージ	・新鮮な味 ・ミルクいっぱい ・甘くてやわらかくフワフワしている ・歯ごたえがある ・弾力性がある ・小さく赤くて甘い ・こわれやすい ・瞬時的である ・見守っていかない ればならない ・子どもと接していく度に、すばらしさがわかる ・純粹に物を見てするどい 指摘をする ・子どもは甘えてくる時は、甘い感じでも、大人のごまかしを鋭く見抜く時など すくなくしょっぱさを感じる ・子どもというものは、びっくりする位、なまいきなことを言っ たりするけれど、その場限りであったり、意味も分らず、真似ているだけ ・集団は個性の集 まり ・小さいからといってあなどっていると痛い目に合う ・個々に味が違う ・甘く優し い気持ちになれる
保育者や園を中 心にしたイメ ージ	・もう1人のお母さん ・暖かい愛情がある感じ ・先生達は優しい ・甘くきびしい ・新鮮 ・足を1歩ふみ入ると顔がほころぶ ・おこるとこわい
保育者や親の役 割、保育のあり 方を中心とした イメージ	・保育は子どもとの戦であるという厳しい面がある、苦味をもちそれでいて優しくつつみこむと いう甘さの両面をもっている ・楽しいことばかりではない、悩んで失敗して、思うようにい かなくて苦しいことが多いと思う ・甘い味や楽しいと思えるようになるのは、何年も先だと思 う ・子どもを叱る時は苦い味、子どもと共にわらう時は甘い味 ・子どもへの愛情や情熱 がなければ保育はなりたない、料理でいえばそれはうま味だと思 う ・ごく日常的であるが 欠かせないもの ・手を抜くことはできない ・あせらず煮こむ ・保育の仕方でも子どもがか わる、中に入れる材料で味がかわるのと同じ ・自分の未熟さが適格に出る、子どもの姿を見 て自分の至らぬところを見るようで苦い思いをする
思い出、その他 を中心としたイ メージ	・園では毎日ミルクが出る、私もミルクを飲んで育った ・ビスケットがおいしく待ち遠かった ・りんごを口に運んでいた子どもが思い出される ・いちばん嫌いなたべもの

表 14

保 育 者	どうしてその味を保育の味だと思うのですか
子どもを中心に したイメージ	・子どもが大好きな味 ・子どもにもいろいろな味がある ・子どもだと思っていると、反対に 教えられるようなところがある ・塩からい子がたくさんいる ・マイルド ・1粒ずつ甘か ったりすっぱかったりする ・接すれば接するほどこしのある味がするでも時々苦い思いをす る ・どの程度でも敏感(調味料) 大変すばらしいものをもっている ・純真な心 ・生き 生きとしてかわいい、でもちよっと油断すると、キューンとしたすっぱさでハットする時があ る ・ほんのりとした甘さをもっている。いろいろな個性をもっているの、噛めば味がでて くる。
園を中心とした イメージ	・家庭的な雰囲気がある ・温かい
保育者自身を中 心にしたイメ ージ	・初めはわからぬが、だんだん味が出てくる ・人間対人間の信頼関係のもとだから(ミルク) ・生きる味 ・味のある仕事 ・長く保育を続けている程味の出る仕事 ・子ども達の成長のた びの喜びは一人
保育のあり方を 中心にしたイメ ージ	・甘さの仲にも厳しい愛とがまんが必要 ・いつも身のまわりであり空気のように、母の味があ り、だしや汁の実で、いろいろの味がたのしめる、いつも同じ味につくることは難かしいが、そ の人、その子どもの味があり楽しめる ・保母が子どもに接する態度や姿勢によって苦くも、 辛くも甘くもなる ・山へ登った時、遠足に行った時、暑い夏、何ととっても心や体をほぐし てくれる、冷水 ・甘くしたり、厳しくしたりで、甘かったり、苦かったり、すっぱく複雑
その他	・苦い経験 ・効果が見えず、社会的には子守りのな価値感しかもたれていない

ま と め

「保育」の感覚的イメージ、特に味覚的イメージについて、連想された食品と人物およびこ
れらの相互関係や、自由記述から連想理由などについてみてきたが、次のように考察するこ
うができた。

1. 「保育」の連想食品と、連想人物から

「保育」の連想食品は、ミルクや甘酸っぱい食品類が多く連想された。

食品の連想には、「保育」ということばを指定したが、現代のように豊富な食品の中からの
選択には、個人差こそあれそれぞれの食品が個人の嗜好と無関係ではないと思われるし、又味
覚以外の感覚イメージも加わっているので更に分析が必要と思われる。

学生は、「保育」を甘い、甘酸っぱいと感じ、人物は、「子ども」と「保母さん」を連想し
た。甘い味覚の中には、1年生も2年生も共に「子ども」を多く連想している。又甘酸い味覚
の中には「保母さん」即ち、自分が保育をする主体的立場に立つての連想が、その「保育」の
役割をより鮮明に画いている。

つまり「連想人物は子どもであるが、味覚的イメージはむしろ保母に近い。これは一見矛盾だが、学生は保育の場の人物としてまず子どもを、味覚的体験としては保育する主体の体験を思いうかべるとのこと」（北川・青木、1982）で理解できよう。

2. 1年生と2年生の比較から

「子どもが好き」と志望し、保育科へ喜々として入学してきた学生が、子どもの外見の可愛らしさ、純粹さや素朴さに、又幼ない頃の園生活での楽しい思い出や、優しく先生への憧れで「保育」を連想していたものが、2年生になり、実習体験の中で子どもに接してみると、外見可愛らしく甘ったるく見えた子どもは、ピリッと痛い手ごたえを示したこと。

又1人1人の個性や発達に応じた「保育」の手だての難しさ、一見楽しそうに見えた園での保育者の生活は多忙をきわめ、そのゆとりのなさの中で、終始子どもの生命を守り、より豊かな人間性をもった子どもの育成という、仕事としての「保育」の重大さに戸惑いはじめた学生の心情を見ることができた。

保育者志望に向かって着実な歩みを進めている学生は、やり甲斐ありと決意を一層強くし、それらの学生の中には、「保育」を形のない食品(?)の水や空気に連想し人間にとって非常に大切なものとしている。一方、「保育」を一番嫌いな食品として連想している者もいる。これらは、その志望の動機や実習の体験にも要因をさぐる必要があると思われる。

3. 保育の場の保育者の「保育」の味から

保育者の味覚的イメージは、甘酸っぱい、複雑と両味覚に集中している。

学生が多くもった甘さは、保育者では非常に減じている。図1や表5、自由記述の中に見るように、保育者としての経験の長い程その甘さは減じていることに1抹の淋しさを覚えるのである。

4. 適性と「保育」の味

北川・青木(1982)は、保育者としての適性が認められる学生は、「保育」を甘く、ちょっぴり苦いイメージとしてとらえており、親の愛情の経験は苦さのなさや甘さに結びついており、又適性の有無とも関係が深い。従って適性にはまず十分な愛情経験が不可欠であるが、さらにちょっぴり苦さを感じさせる体験がつけ加わる必要がある。と指適している。

このことから考えられることは、1年生の「保育」の理解には、順次開始される実習や、専門科目の中で、より「子ども」の本質を学ばせるなど多少の苦さを感じさせる体験が必要であると思われる。

2年生は、保育の場で個々が実習体験をするが、それらの体験が必ずしも「保育」をよく理解し、保育者としての適性を加えたとは云いきれない。従って実習後のあり方が大切となる。

総合講座的な教科をもち、保育の場面で展開した保育者や子どもの動き、それに対応した学生の言動について、心理学的に、教育学的に、社会学的にそれぞれ専攻の教員がそれぞれの立場から話す。という場の設定が必要と思われる。

ここにおいてはじめて、体験が「保育」の認識レベルに近づくと共に、甘さと苦さのバランスが調節され適性にプラスされるのではないだろうか。

保育者の「保育」の味覚的イメージに見られるものは、心情として理解できるが、ゆとり(いろいろあり然も重大なことだがここでは省略する)をもち、そのゆとりが甘さに加わることが望ましいのではないか。1年生がもつ、夢見るような「保育」の感覚的イメージもすてがたく、その甘さも少しはもちたいものである。

5. 望ましい「保育」の味を求めて

学生も、保育者も共に、「保育」の味覚的イメージを甘酸っぱい食品に連想した。その食品

の中には、山のぼりのあとの1杯の水、又炭酸ソーダーやレモンなどの、多くの酸味をもったものを表出した。この酸味は食品学的にもストレス解消に役立つといわれる。このことは、「保育」のもつ、或さわやかさを連想していると思われる。

「保育」には、苦さも、甘さも、又複雑ないろいろのあじもある。けれども、その中のさわやかさが「保育」の味覚の代表なのかもしれない。

現代社会の人間生活はストレスが多い。しかしこのストレス回避のための「保育」志向でなく、真の「保育」のさわやかさを志向し努力する学生の、自己実現に援助できるように考えていきたい。

本稿を終るにあたり、調査アンケートにご協力いただいた保育園の先生方、ならびに研究の調査、データ解析とご助言をいただいた本学北川歳昭氏に深く感謝いたします。

付記 本研究論文の一部は、全国保母養成協議会第21回研究大会において口頭発表したものである。

本研究は中国短期大学昭和57年度研究助成金で行う一部であり、今後継続するものである。

引用文献

- 井上忠司 まなごしの人間関係 講談社現代新書
永沢幸七 女子大生の生活と心理 大日本図書
梅野 悟 エミール入門 明治図書
川合貞子, 児童に ける色彩象徴化 (1973) 保育学会第26回発表論文
青木里喜子, 「保育」の味覚的イメージと適性 (1) 全国保母養成協議会第21回発表論文
北川歳昭 「保育」の味覚的イメージと適性 (2) 全国保母養成協議会第21回発表論文